

保育者養成機関における「表現（音楽）」の授業に関する研究
——実習における幼児観察レポートを通して——

荒木紫乃
(川村学園女子大学)

はじめに

平成元年に改正された新教育要領では、領域「表現」が新しく登場した。これは、それまでの音楽リズムと絵画製作の単純な合併でないことは周知のとおりである。そして保育者養成機関での授業のありかたに変革を少なからずせまられた。領域「表現」の精神をふまえると、保育者にはどのような資質が望まれるのか。基礎技能があるとすれば、それは何なのか。ピアノや歌が上手く弾け歌えることが基礎技能になるのだろうかなど。これらの問題は、保育者養成機関の授業内容と直結して、今なお頭を悩ませているのではないだろうか。

幼児の表現を豊かに育てるために、保育者はさまざまな援助を考える。その際、生活や遊びの中でみせる幼児の姿から、幼児の表現に関する情報（表現への興味、関心、方法）を得る。そして幼児がどのような表現をしているか。その背景にある動機は何か。その表現と仲間の関係。個々の幼児独特の姿などを受け止め理解する。更に、それらが音楽に関わった表現とどのように関連しているかを考えて、保育者は活動の内容を決めることができる。

そのような幼児の表現を理解する手がかりについて教えるのは、保育者養成機関の授業の重要な課題である。

そこで、実習期間を通して、学生に印象に残った「幼児の音楽表現の事例」と「表現を育てる援助の方法で判ったこと」を観察、記録してもらい、そのレポートを通して「何を学生が観察の視点としているか」ということを明らかにし、それをもとに、授業内容のあり方について考察することを本研究の目的とした。

今回は「幼児の音楽表現の事例」を中心に進めたい。

II、研究の方法

- 1) 方法：実習を通して観察された「幼児の表現」と「保育の援助」に関するレポートの記述を分析し、それをもとに、授業内容を検討する。
- 2) 調査時期：平成5年10月
- 3) 調査対象者：東京都内の保育者養成校の学生
(1年女子60名)
- 4) 結果：詳細は当日発表

III、結果と考察

学生が、実際に園生活の中で子どもとふれあい、自分の目で捉えたものの中から、音楽表現の事例として記述したレポートを検討してみた。事例として記述

したこと自体が音楽表現と認めたことである。それらを分析するといいくつか共通した視点がでてきた。幼児の音楽表現を以下のような項目との関連で捉えている。

★観察の視点として以下のものがあげられた。

- 1) 表現を同じ様式で一斉にする（二人以上）
- 2) 表現している状況（生活や遊びの文脈）
- 3) 表現している幼児の表情
- 4) 表現が先入観（音楽表現と認められる枠）に当てはまるもの

1) 園生活の中で、朝の会やお弁当の前、帰りの会などで行われる「歌う」という表現をあげた例が圧倒的に多かった。その他、子ども会や運動会などの行事に向けて「歌う、ダンスをする」などの表現も多かった。

リトミックや器楽合奏のような明らかに音楽指導の場面をあげたものもあった。

これらの中で共通しているものは、「一斉に」大勢の幼児が同じ様式の表現をするということである。その集団で（あるいは仲間）で認められている表現様式であり、多くの場合、大人にも共通した様式である。

観察の視点の一つとしてあげられる。

2) 「製作の時間に、先生がピアノを使って、子ども達をスムースに動かし道具を取りに行かせる。」など先生の指示や合図として使われることにより、幼児が表現する行動も音楽表現と捉えている。

表現される時の様子や幼児の状況との関連も視点としてあげられる。

3) 幼児の「流れている音楽に自然に反応している」「はないちもんめをみんなで一緒に歌いながら遊ぶ」「楽しそうに身体を動かしている。手拍子をリズミカルにしている」などの表情から音楽表現と捉えている。これらの多くは、生活や遊びの文脈からどのように幼児が表現しているかを読み取り、音楽表現かどうか判断している。表情を視点としてあげられる。

4) 「歌を歌う、音楽に合わせてダンスをする」など誰にでも認められる音楽表現の枠組を作り、それに幼児の表現をあてはめて、音楽表現を捉える。枠にはまらないので音楽表現とはみなさないという判断をしたものがあった。「幼児の音楽表現がない」と書かれたものがあった。これは、音楽という大人の先入観という一つの視点である。

★保育者の援助の中から、音楽表現を育てる援助であると判断した「援助の事例」を検討してみた。いわゆる<音楽指導>という場面をあげた事例が、最も多かった。その「指導」を音楽表現を育てる援助であるとした視点と、「その他の援助（あまり指導的でない）」、環境、共感などを援助であるとした視点を上記の「表現の受け止める事例」にあげられた視点と対応させてみると以下のような関係が見られた。

観察の視点	援助の視点
一斉（状況や表情の記述なし）	指導性の濃い
一斉（状況や表情の記述あり）	指導性の薄い 環境、共感 その他
個々の姿	

印象に残った音楽表現の事例として、多数を占めたのが、一斉に同じ様式の行動をしている表現（歌う、踊る、楽器による演奏のような形態）であった。更にその中でも、子どもの表情やその状況（生活や遊びの文脈）を全く無視して、上っ面の行動にのみ注目している者は、援助の方法でも指導性の濃い教科的色彩の援助をあげていたのが特徴であった。このことは、複数の幼児が同じ表現様式をとらないと、音楽表現という枠組にはまらないという見方を学生がしていることであるのではないか。一斉教授や画一指導の形態のもとにある表現の意味を問い合わせなおすことが、今後の課題であると感じた。

しかし、<一斉>をあげた中で、数は少なかったが幼児が表現している状況や表情を捉えている者は、「子どもたちは、元気の良い子は足を大きくひろげ、手をうしろに組み、上半身を前に押し出すようにして・・・」「ピアノが鳴りはじめると身体全体がリズムにのっていました」のように、個々の姿に注目しているものもあった。それらは、援助の方法でも「覚えさせるのではなく、楽しいものなんだよと知らせる教育が大事」「歌うことによって仲間と一緒に同じことをする楽しさや歌うことの気持ちよさ、・・充実感、自身を身体で覚えることが重要」などの記述に見られるように、指導的でない援助の方法（共感、環境）に注目し、個々の幼児の表現を育てることの大切さに気がついていた。

IV、今後の問題点

レポートを分析した結果から、次のことが判った。画一的な幼児の表現をあげたものは、一斉教授や画一指導を援助として捉え、状況や表情といった個々の姿に注目したものは、指導的でない援助の方法をあげる傾向がある。

以上のことから、幼児の表現をより適切に受け止めるためには、状況（生活や遊びの流れの中で受け止める）や表現の動機、仲間などの人間関係との関連で見ることの重要性を授業で取り上げる必要があることを感じた。

その幼児の表現を理解するためには、その幼児が、歩んできた歴史、背景まで理解する必要がある。それらが、幼児の個性を作り、その幼児の表現となる。それを理解するためには、日々の生活の流れの中でその子どもの姿を受け止めるのが最良の方法である。そのような「幼児理解」の中に音楽表現の芽を見いだすことができるだろう。それらを、どのように授業内容に入れることができるか。実習に行く前に、筆者が良いと思った事例を聞かせたり、一部であるがビデオで見せたりした。しかし、これだけでは不十分であることが判った。このことは、今後の大きな課題となった。

2例のレポートであったが、「実習園が自由保育だったので、幼児の音楽表現は、2週間の間には全く見られませんでした」というのがあった。これは、音楽表現をかなり固定した枠組（先入観）で捉えていると思われる。しかし、<一斉>をあげた者の中にも少なからずその傾向がある。学生は、それまで受けしてきた音楽教育のため、学校や園生活の音楽を狭い枠で捉えているのではないだろうか。音楽観をもっと広くするにはどうすればよいか。そのためには、学生のもつてている「音楽観」はどのようなものかを知ることも必要であることも今後の課題である。

幼児期とは、大人のように洗練された音楽表現行動に至る前の段階にある。そのような未分化な段階のもの意味を理解し、表現を受け止め、豊かに育てるにはどうすればよいのか。そのような目をもてる保育者を養成するためには、どのような授業の内容が適切なのか。

改めて、学生と共に自分自身の「幼児理解」や音楽観を広げる必要性も感じた。

参考文献

- 小川博久「保育原理 2001」同文書院
角尾和子「幼稚園教育実習必携」川島書店